



# 幼児とともに「うたう」こと

庄司康生

## 幼児のうたの三つの要素

幼児のうたは、何を要素としているのでしょうか。要素が集まって構成されるといふ要素ではなく、何によって、幼児のうたは成り立っているのでしょうか。西洋音楽は、一般にリズム、メロディー、ハーモニーの三要素からなるとされますが、幼児のうたがそれらから成り立っていると言っても、改めてあまり意味はないでしょう。

福島県郡山市の郊外にある田村町つつみ幼稚園。

ジャングルジムの上の保育者と幼児が、空の雲にうたいかけています。

「くもさん、くもさん、こつちへきてね……」

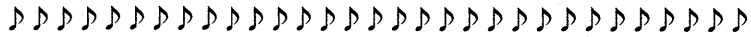
くもさん、くもさん、こつちにおいで。……

(あつちいっちゃったよ。こつちこないかな)

……(きてくれて) ありがとう」

保育者の言葉をまねながら雲にうたいかける幼児

の声は、伸びやかに空に上がっていきます。



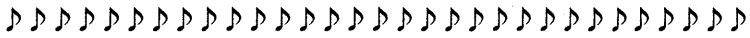
声が雲に届くわけではないし、雲が返事をするわけもなく、人間との間のような応答関係はもちろんありません。しかし幼児の声は、人に対しても対象に対しても、不思議に見事に伸びやかに届いていきます。幼児がうたいかけるとき、その身体は雲と「ともにある」と言っていていいでしょう。

さかなつりごっこをしながら、「オ・サ・カ・ナ、オ・サ・カ・ナ」と唱和している子どもたちの声は、うたと言っていていいように思えますが、いったい何をもって私たちはこれを「うた」と言うのでしょうか。もちろんリズムやメロディーもそこにはあるのですが、そのような外在よりも、それを幼児の「うた」たらしめている本質的な要素は何なのでしょうか。ジャングルジムからうたいかけられる子どもたちには「雲」という対象があり、「オサカナ」には「さかな」という対象があります。あるいは一緒にうたう

保育者や友達といった、他者の存在もあるでしょう。うたう対象、うたいかける対象、あるいはともに向たい、声を重ね合う他者の存在。

独り言のようなうたはどうでしょう。たとえば「オ・サ・カ・ナ」と一人で口ずさむときも、「おさかな」という対象があり（もし現実になかったとしてもその子の想像の中にはいるでしょう）、また周りに誰もいなくても、その子の中にもう一人の自分（意識的に明確でなかったにしても）がいるでしょう。自己の内に、うたいかける他者、あるいはともに向たい他者が存在しています。

うたいかける対象も他者と言えますから、うたはまず、他者との間において始まり、他者との間で「うた」になる、と言えるでしょう。関係の中に「うた」があり、「うた」はそこから生まれ、またそこからしか生まれません。幼児のうたの要素の第一は、



(他者との)関係性であると言いたいと思います。

もう一つ、うたになくはならないもの、それは「声」です。

幼児の声は、大人と異なり直接的に対象に届いていきます。ストレートにじかにこちらの身体に届き、触れたりしてびっくりするときもあります。

それはまた、身体や呼吸と密接に結びついています。身体のアクションがそのまま幼児の「声」となって動きだし、こちらの身体に届いてきます。うたがあればそこには、このような幼児の声があるわけですが、それは必ずしも音声として発せられていなくても、現れ、伝わってきます。

心の内で、つまり身体の内側で動く何かを外に出して、身体の声となって現れます。身体の動勢や力動感がアクションとして現れ、伝わってきます。それも広い意味の「声」ですし、そのような身体の

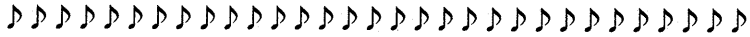
「声」と、私たちはともうたうことがしばしばあります。

幼児のうたのもう一つの要素は広い意味の「声」＝アクションであると言えるでしょう、それはまた身体性と言い換えることができるかもしれません。

さらに、うたに必ず伴うのは「言葉」です。歌詞というほどのものでなくても、たとえば「くもさんこっちにおいで」「ありがとう」でも、遊びの中で口ずさむ「オサカナ」でも、そこには言葉があります。幼児曲の中の「ハイ」や「ヘイ」、あるいは「ホッホッ」なども広い意味の言葉でしょう。



JASRAC 出0800874-801



この言葉を幼児が発するとき、幼児の呼吸と一つのものとして発せられます。呼吸がたつぷりと出るときは言葉もたつぷりと出ますし、浅い呼吸では言葉も豊かに現れません。

幼児がうたう「マイゴノ マイゴノ コネコチャン」は、楽譜に記された規則正しく反復する拍のとおりには発声されません。その子の呼吸と一緒に、たとえば、○の次の音に強く長いアクセントがついたり、∨で息継ぎして、

「○マイゴノ ○マイゴノ コ○ネコチャン

○あなたの ∨おうちは ドコー ∨デスカ」

のようにうたったりします。

一見、発音の未成熟に見えたりしますが、ここにその子のイメージが表出し、言葉の、ひいては音

楽のリズムを生み出していく生きた身体のアクションがあります。呼吸と一緒に現れるその子独特の、そしてそのとき一回性の独特な「間(ま)」の動きの中に、言葉のイメージやリアリティが現れ、聞いているものもそれを感じ、一緒に楽しむことができます。そのイメージを楽しみながら発見したり、その子独自のリズムやアクセントが呼吸として現れてくることを、驚きをもって共感したりします。それは、こちらのリズムとはズレがあるわけですが、そこにおもしろさと共感の可能性と、新しいリズムやイメージの創造の豊かな契機があります。このズレを未熟や間違いとみると、共感的なイメージ創造、音楽表現の可能性を貧しいものに閉ざしてしまいます。このような相互的な広い意味の言葉、ナラティブな言葉が、幼児のうたの三つめの要素と言えるでしょう。



## イメージとリズムが新しく生まれる

文字に書けば「ホッホッ」であるだけのものが、一人ひとりの子どもの一画一回の

「○ホッ ○ホッ ホッ ∨ ○ホッ」や

「ホーッ ○ホッ ホッ ○ホッ」とともに、

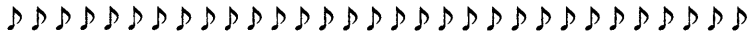
こちらもそこに自分の声を響き合わせ、また響き合う中に新しいイメージが生まれてくることを楽しめ合う相互性の中でうたうとき、どんなに創造的な瞬間を生きていることができるか、これが言葉の、あるいは音楽の原点なのではないかと思えます。

日本語は、一音一拍を原則として発音される言語です。これは、このようないくつも相互性の共鳴の豊かな可能性をもった言語といえます。

たとえば、「きらきらほし」の最初の「きらきら光る」は、英語では“twinkle twinkle little star”と

なります。この英語の中には四つの単語が含まれていますが、日本語の歌詞では「きらきら」と「光る」の二つです。発音される母音と子音の数は英語が二十、日本語が十四。ただし、欧米語と異なり、日本語は母音と子音が一体となって発音されますから、実際の発音数は二十と七になります。同じ四分音符八つ分の中に、これだけ音数の違いがあるわけです。

同じ拍の中にどれだけ音数を入れて伝えられるかでは、子音を中心とする欧米語が圧倒的に多いわけですが、母音を中心とする日本語は、逆に一つひとつの音に豊かな響きを伴います。この響きの内に、微妙なニュアンスの感得や響き合いが生まれます。母音がたっぷりとした呼吸で発音されると、そこにさまざまなイメージやニュアンスが現れるといつていいでしょう。響きの中に「意味」が現れ出



るように感じられるのが、日本語の特徴です。最近の特に若い人の日本語は、この一拍一拍の原則が崩れつつありますが、幼児は自らの身体の呼吸と一緒に発音しますから、この響きがリアルにまた豊かに、そして生き生きと現れ出ます。

幼児のうたのこの豊かさと保育者がともいうたうとき、楽譜に添ってうたう保育者と、自分の呼吸でうたう幼児の間には、当然、拍のズレが生じます。しかし、そのズレから幼児のイメージがくつきり見え、保育者がそのズレを味わい、子どもの側に寄り添いつつ自らもうたうとき、触発し合う相互性の中で新しいイメージが共有され、拍ではない新しいリズムが生まれてきます。その過程を味わうことが幼児とうたう楽しさであり、充実した時間をもたらします。歌が「うた」として動きだし、現れ、生まれ出る感覚です。

## ともいうたう大人の存在

幼児とともにこのようにうたうとき、保育者に求められることは「自らを変えろ」やわらかさ、あるいは「よく聴く耳」です。よく聴き、また自らもうたい合うあり方は、「受動的な能動性」ともいええます。声でうたうときはもちろん、ピアノで伴奏するときも同様です。幼児のピアノ伴奏は、このやわらかさでうたうピアノ、よく聴くピアノでなければ、幼児のうたを殺してしまいます。

郡山女子大学附属幼稚園で「音・動き・ことば」の実践をする三瓶令子さんは、幼児とともにうたう体験を重ねています。自然な呼吸・発声で、言葉を感じながら、あそび歌やわらべ歌をうたったり、フルーツシューカーやザイロフォンでリズムの対話をしたり、ピアノでは幼児とうたいたいつつやわらかに触



れ合います。

声でもピアノでも、やわらかに身体全体で語りかけうたいかけます。幼児の、外に現れる声も、また身体の内なる声をも聴き、自身が変わりながらうたい合うやわらかな大人のうたいかけは、幼児の身体に染み入っていくように見えます。うたい合う場の相互性は、音楽教室で「歌」を教えたり、「音楽的な活動」をするのとは異なるものとして現れます。

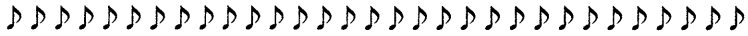
幼児の身体に染み入り、内側から触発する大人のアクションは、保育現場で往々にして見られる「元気のいい」大きな声の活発さではなく、やわらかに子どもに応じます。それはむしろ、リアクションであるといった方がいいかもしれません。リアクションとしてのアクションが、幼児とうたう大人のうたい方といえるでしょう。

こんなときもあります。「あなたのお名前なんで

すか」と問いかけられた子が返答できないとき、その子と同じリズムを感じながら、代わってその子の名前をうたい、関係性の中でリズムと言葉をその子の身体に届けていきます。そのうたい合いの中で、「ぼくの名前は VVO ショジャスオ」と一気呵成、ひとかたまりの音声でしか応えられなかった子が、共有リズムの中に「棲み込む」ように、ゆったりと響き合うようになっていきます。

ともいうたう大人の身体を通して、言葉やリズムが、共有されるリズムや言葉として、幼児の身体の内にも生み出されていくように見えます。あるいはそれは、大人の身体を媒介として伝えられる文化としての言葉やリズムが、幼児のものとしてその身体内に再創造されていくことなのかもしれません。

たとえば「こんな感じ」と言って、大人自身の名前を入れて「わたしの名前はレイコ」とうたうと、



同じく「わたしの名前はレイコ」と大きな声でうた  
い返していた男の子が、やがて確かなリズムの中で  
自分自身の名前をうたって返すようになります。こ  
のことは、身体の内奥でのそのような再創造の確か  
さと、他者との関係の中で明確になっていく、その  
子の自己を感じさせます。ともいうたう大人は、  
「間」身体性の共有の場の中で、自らの身体を媒介  
としつつ、新たに言葉や音楽や文化や社会につな  
がっていく基礎を、幼児の身体の内にも生み出して  
いくと理解してよいと思われまます。

ともいうたう大人の身体がこのような媒介をする  
ものだとすれば、保育者は、良質な音楽性はもちろん、  
高い文化性や開かれた社会性を身体に内在させ  
ていなければならぬでしょう。音楽性の高さとい  
っても、ピアノが上手に演奏できればよい、とい  
か、「音楽的」な発声で正確に歌えればよい、とい

うことではありません。幼児にうたいかけ、とも  
うたい合う音楽性の高さが求められます。ピアノ伴  
奏の場合も、曲のタイプによって幼児に働きかける  
性質が異なりますから、それを知りつつ、ピアノで  
幼児とうたい合うことが大切になります。

そもそも元来、音楽の本質はこのような相互性に  
あるのではないのでしょうか。

またこのように「うたい合う」関係性は、音楽に  
限らず、大人（保育者）と幼児の関係全般に言えるこ  
とだと思えます。

幼児教育にかかわるみなさん。

ここから「うた」を考え始めませんか。そして、  
子どもとともに「うたい合い」ませんか。

（埼玉大学）